

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	吉田 圭佑
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題 目 Impact of Inpatient Educational Programs on Mortality after the Start of Dialysis Therapy （教育入院プログラムが透析導入後の生命予後に及ぼす影響）
	掲載誌 Clinical and Experimental Nephrology 2022; 26: 819-826
	主査 池森 敦子 副査 曾根 正勝 副査 右田 王介
[論文の要旨・価値] 透析導入前の慢性腎臓病 (CKD) 患者に対して、多職種で患者教育を行う事は、CKD の進行を抑制する可能性が報告されているが (Clin Exp Nephrol, 2021)、透析療法開始後の生命予後への影響については、明らかとなっていない。当院の腎臓・高血圧内科では、1 週間程度の多職種（腎臓内科医、看護師、医療ソーシャルワーカー、栄養士、薬剤師、理学療法士）で行う教育入院プログラム (Inpatient Educational Programs: IEP) を作成し、患者教育を行っていることから、本研究では、後方視的に IEP 参加の有無と透析療法開始後の生命予後との関連を検討した。対象症例は、2011 年 1 月 1 日から 2018 年 12 月 31 日までに透析療法を開始した患者 (490 名) であり、IEP 参加の有無により 2 群 (IEP 群 129 名、非 IEP 群 361 名) に分け、透析開始時の患者背景を比較した。また、各群の生命予後は、Kaplan-Meier 法で算出し、log-rank 検定で比較した。さらに、Cox 回帰分析を用いて、交絡因子調節後のハザード比 (HR) を算出した。観察期間の中央値は 3.4 年であり、その間に 153 名 (31.2%) の死亡が認められた。透析開始時の患者背景については、IEP 群では、非 IEP 群と比較し、有意に血清アルブミン値が高く ($p < 0.001$)、血清総コレステロール値が低値であった ($p < 0.01$)。また、IEP 群では、非 IEP 群より日常生活動作が自立している方が有意に多かった ($p < 0.05$)。5 年生存率については、IEP 群で 81%、非 IEP 群で 61.5%であり、有意に IEP 群で生存率が高かった ($p < 0.01$)。Cox 回帰分析では、IEP への参加は、他の因子 (年齢、性別、腎機能、血清アルブミン、身体活動等) とは独立した死亡リスク減少因子であった (HR 0.57, 0.37-0.88, $p < 0.05$)。以上より、IEP への参加は、透析療法後の良好な生命予後と関連することが示唆された。本論文は、透析患者の生命予後を改善する一つの対策法を明らかとしており、大変意義ある内容と考える。	
[審査概要] 審査は主査、副査 2 名および 1 名の陪席者のもとで行われた。約 20 分間のプレゼンテーションの後、40 分程度の質疑応答が行われた。プレゼンテーションでは、本研究を立案した研究背景、や目的、方法、結果、limitation や今後の展望を含む考察、結論が、丁寧に説明された。質疑応答では、生命予後の改善に強く関与した教育の内容、教育者数や教育時間の生命予後への影響、教育入院で減少した死亡原因、多変量解析で使用した独立変数を選択した理由など、多岐にわたる質問がされたが、申請者は、概ね的確に回答した。	
最終試験結果の要旨	
[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 申請者は、腎臓病に関する幅広い専門知識と十分な研究能力、研究意欲、発表能力を有すると判断された。質疑への応答態度は誠実であり、英語論文の一部和訳により評価された英語能力も問題なかった。また、提出された 2 本の参考論文は、英語筆頭論文であり、申請者は、学位 (博士) 授与に値すると考えられた。	